

審査の結果の要旨

氏名 曾山 いづみ

近年、団塊世代の教師の退職に伴って新人教員が多く採用されるようになり、その育成は重要な課題となる一方、新人教員の早期の退職も問題とされている。本研究は、新任期の教師を対象に、その経験を縦断的に描き出した上で、どのようなシステムが彼らの発達を支え困難を乗り越える助けとなるかを検討したものである。

本研究は、全5部10章から構成されている。第Ⅰ部「研究の展望」では、教師の初期発達過程がどのように検討されてきたのかを概観し(1章)、その後、本研究の枠組みとして、その理論的基盤と方法論が提示された(2章)。第Ⅱ部「新任小学校教師の経験と変容過程」では、新任小学校教師9名の1年間に伴走して縦断的にインタビューを行い、語り内容の変化の特徴とその背景が質的に検討された(3章)。結果として、同僚との関係・保護者との関係によって教師としてのアイデンティティの確立に対する影響が違ってくこと、自分なりのスタンスを確立していくために夏休みにおける経験の振り返りが重要な意味をもっていること等が仮説として取り出された。次に語り方の縦断的な変化が分析され、同じテーマを繰り返すことが、自らのものの見方を強調したり再構成したりといった機能を有する点が指摘された(4章)。第Ⅲ部「休む・辞めるに至った人の経験過程」では、就職後2年以内に休職・退職した3名の教員・元教員に聞き取りを行い、そこにどのような経路が認められるのかを詳細に記述した(5章)。また、この結果を研究1・2の協力者からのデータと比較することで、職場を離れざるを得なくなる際の分岐点と条件を抽出した(6章)。次いで第Ⅳ部「新任・若手教師を支える人間関係」では、まず新任教員の支援の制度の1つとして導入されているメンター制度に注目し、メンターとメンティ双方の視点からその制度がどのように経験されているのかを明らかにした(7章)。さらに、スクールカウンセラー11名に対するインタビュー調査をもとに、彼らが若手教師支援にどのような役割を果たしているかを検討した。結果として、彼らが若手教員と周囲の関係構築に特に注意を払っており、必要に応じて対応するそのプロセスがモデル化された(8章)。最後に、新任教員およびその関係者からこれまで得られたデータを総合し、新任教員と周囲の間に「ずれ」がどういう背景から生じるのかを総合的に検討した上で(9章)、新任教員が「主体性」を実感できる状況を作ることの重要性、それが阻害されやすい構造的な条件、およびその条件を緩和する対話システムの提言がなされた(10章)。

本論文は、新任教員の初期の体験を生き生きとした記述で読み手に伝えていること、その体験の経過がいかなる条件によって支えられているのかをシステム論の立場から多面的に解明していることなどが高く評価された。それらの研究結果をもとに、今後ますます重要になる新任教員支援に対して、具体的提言を行なっている点は、臨床心理学的な実践上の意義も大きく、他の専門領域の実践との対話の可能性も開いているという点で、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。